〔島根女子短期大学紀要　Vol.28, 87～95 (1990)〕

3DK型県営住宅の住まい方

大隈弘子・塩田洋三・篠原正積・船越伸男
(住居学研究室)　　(島根県土木部)

On the Use Pattern of 3DK Units Managed by Shimane Prefecture

Hiroko OHKUMA ・Yozo SHIOTA
Masazumi SHINOHARA・Nobuo FUNAKOSHI

1．はじめに

県営住宅においても，住宅の「質」が問題とされる時代に入っており，その公的な性格からも，これからの住宅ストックの「質向上」に貢献することが強く望まれていると言えるであろう。一般住宅の居住水準の向上に伴い，県営住宅においても，以前の2DK中心から現在の3DK中心となり，将来はさらに規模増も期待できるものと思われる。このような状況下で，より住要求に対応できる，新しい設計・計画指針の作成が望まれているが，そのための資料となる，現在の3DK型における住まい方実態，入居者評価についての詳しい報告は少ない。現在の県営住宅で供給の中心である3DK型の住まい方，入居者評価を分析し，大都市圏で多いLDK系列の平面等の，次の段階の平面計画を検討することは，意義が大きいと思われる。

この調査研究は，県営住宅入居世帯の住要求により対応した住戸平面計画のあり方を探ろうとするものである。

2．調査概要

前述の目的のために，松江市内にある県営住宅の3DK型で，最近（1985～1987年）建設されたものから同一タイプ30戸以上のものを調査対象として選択した。それは，図2，図3に示す4タイプである。

調査は，原則として主婦を対象に質問紙留置法で，1989年7月14～17日に実施した。調査対象住戸204，調査票回収数167で，回収率は81.9%であった。

3．調査結果および考察

3－1　入居者の属性

家族構成，家族人数を表1に示す。家族構成については，「II夫婦＋長子就学前児」の世帯が3.5割ともっとも多く，「I夫婦のみ（妻40歳未満）」が1.5割で若い世帯が多い。「III夫婦＋長子小学生」，「IV夫婦＋長子中高生」「V夫婦＋長子19才以上」，「VI夫婦のみ（妻40歳以上）」，「IX母＋子供」が各0.5割～1割程度であった。家族人数については，2人，3人，4人世帯の割合が，各3割あり，

表1　家族構成　家族人数

家族構成・人数			(%)
家族構成	I	夫婦のみ(妻40才未満)	27 (16.2)
	II	夫婦＋長子就学前児	58 (34.7)
	III	夫婦＋長子小学生	18 (10.8)
	IV	夫婦＋長子中高生	10 (6.0)
	V	夫婦＋長子19才以上	14 (8.4)
	VI	夫婦のみ(妻40才以上)	12 (7.2)
	VII	夫婦＋祖父母	1 (0.6)
	VIII	夫婦＋祖父母＋子供	1 (0.6)
	IX	母＋子供	17 (10.2)
	単	(単身者(65才以上))	4 (2.4)
	他	(その他)	4 (2.4)
	不	明	1 (0.6)
家族人数	1	人	4 (2.4)
	2	人	51 (30.5)
	3	人	53 (31.7)
	4	人	47 (28.1)
	5	人	11 (6.6)
	不	明	1 (0.6)
	平	均	3.1
合		計	167 (100.0)

平均は3.1人であった。

夫の職業は，会社員・公務員が8.5割を占める。妻または女性の世帯主職業は，専業主婦が5.5割，フルタイムの職業が2.5割，パートタイムが2割で，半数近くが仕事をもっている。

3－2　住まい方実態と要求

3－2－1　公室（食事・だんらん・接客）

1）ふだんの食事

ふだんの食事場所を表2に示す。DKで食事をする世帯の割合は，DKが7畳大で平面の短辺2700mm，両側の居室への通路を兼ねるAタイプでは5.5割にすぎないが，8畳大正方形平面で，和室1（図2参照）のみへの通路を兼ねるBタイプは9割となっている。また，6畳大で短辺3200mm，和室1（図3参照）のみへの通路を兼ねるC,Dタイプでは8割強であった。つまり，ふだんの食事場所としてDKが使われる場合は，DKの広さだけでなく，ダイニングテーブルのスペースが確保しやすいかどうかで決まってくる。

DKで食事をしない世帯は，すべてDKの続き和室である和室1を使い，その場合の和室1の半数は寝室の転用であり，全体の1割の世帯は食寝分離がされていない。

2）だんらん

表2　ふだんの食事場所（MA）(%)＊

タイプ	DK	和室1		不明	調査数
		寝室	余裕室		
A	17 (56.7)	2 (6.7)	12 (40.0)	2	32
B	27 (90.0)	3 (10.0)	1 (3.3)	3	33
C	57 (83.8)	8 (11.8)	6 (8.8)	2	70
D	22 (81.5)	5 (18.5)		5	32

＊不明を除いた各タイプ別の%を示す

だんらんに使う部屋がDKのみの場合をだんらん室縮小型，DKと和室1または和室1のみの場合を標準型，それ以外の場合をその他の型とし，タイプ別の割合を表3に示す。標準型が各タイプ7割～9.5割を占め，ふだんの食事場所とあわせてみると，家族共用室はDKと和室1という選択が典型パターンである。だんらん室縮小型は，各0.5割～2割で，DKが他タイプに比べて広いBタイプはその割合がやや高い。だんらん室その他の型が，各0.5割～1割あり，静かなだんらん室，あるいは洋室のだんらん室要求の強い場合の選択である。

だんらん室，寝室の転用，分離について，表4に示す。転用が各タイプ2～4割あり，全体の3割の世帯でいわゆる公私分離はなされていない。この場合はほとんどが主寝室の転用である。和室1をだんらん室兼主寝室とした理由は，ライフステージが低い世帯では住生活の分離を志向しない傾向がある事，主寝室南面志向，Ⅳ・Ⅴの4人以上世帯での寝室数の不足があげられる。これに加えて，余裕室がある世帯では，だんらん室の和室1にはタンス類が少なく，実質的にもっとも広い部屋であり，広さを重視した主寝室選択の結果という推測もできる。住生活の分離が望ましいとすれば，北側居室の拡大が有効であろう。

3）接客

客を通す部屋を表5に示す。気軽な客のもてなしには，和室1が各タイプ7.5割～9割，DKが各2～4割，その他の部屋が1割程度であり，家族のだんらんの部屋に通している。

気を使う客は，2割の世帯でなしと回答している。気を使う客を通す部屋の，気軽な客との違いは，余裕室（DK以外の寝室に使用しない居室）である和室2を使う割合が各0.5割～1割とやや高く，DKがほ

表3　タイプ別だんらん室の型

タイプ	だんらん室の型 (%)				＊2該当なし	不明	合計
	縮小 DKのみ	標準 (DK)＊1 和室1	その他	計			
A	1 (3.4)	27 (93.1)	1 (3.4)	29 (100.0)		3	32
B	6 (20.0)	21 (70.0)	3 (10.0)	30 (100.0)	1	2	33
C	1 (1.5)	65 (95.6)	2 (2.9)	68 (100.0)		2	70
D	4 (14.3)	21 (75.0)	3 (10.7)	28 (100.0)	1	3	32
計	12 (7.7)	134 (86.5)	9 (5.8)	155 (100.0)	2	10	167

＊1DKをだんらんに使う場合も使わない場合も含む

＊2だんらんにあてはまる生活行為がない

表4　タイプ別 だんらん室(F)と寝室(P)

タイプ	(%) PF転用	(%) PF分離	(%) 計	＊該当なし	不明	合計
A	6 (20.7)	23 (79.3)	29 (100.0)		3	32
B	11 (36.7)	19 (63.3)	30 (100.0)	1	2	33
C	22 (32.4)	46 (67.6)	68 (100.0)		2	70
D	12 (42.9)	16 (57.1)	28 (100.0)	1	3	32
計	51 (32.9)	104 (67.1)	155 (100.0)	2	10	167

＊だんらんにあてはまる生活行為がない

表５　客を通す部屋（MA）(%) *1

客	タイプ	DK	和室１		和室２		和室３	洋室	*2なし	不明	計
			寝室	余裕室	寝室	余裕室	寝室	余裕室			
気軽な客	A	5 (17.9)	5 (17.9)	20 (71.4)	1 (3.6)		1 (3.6)	——*3	3	1	32
	B	11 (36.7)	13 (43.3)	10 (33.3)			——*3	1 (3.3)	2	1	33
	C	19 (28.8)	17 (25.8)	36 (54.5)	3 (4.5)	1 (1.5)	——	1 (1.5)	4		70
	D	11 (39.3)	12 (42.9)	9 (32.1)		2 (7.1)	——	2 (7.1)	3	1	32
気を使う客	A		4 (15.4)	19 (73.1)		2 (7.7)	1 (3.8)	——	6		32
	B	2 (7.7)	13 (50.0)	8 (30.8)	1 (3.8)	1 (3.8)	——	2 (7.7)	6	1	33
	C		11 (19.3)	37 (64.9)	3 (5.3)	5 (8.8)	——	1 (1.8)	13		70
	D	1 (4.3)	11 (47.8)	7 (30.4)	2 (8.7)	2 (8.7)	——	1 (4.3)	9		32

*1なし，不明を除いた各タイプ別の%を示す　*2該当する客はなし　*3該当する部屋はなし

表６　DKの広さ評価 (%)

タイプ	1. 不満	2. やや不満	3. 普通	4. やや満足	5. 満足	計	平均値	不明	合計
A	2 (6.3)	13 (40.6)	9 (28.1)	6 (18.8)	2 (6.3)	32 (100.0)	2.7	0	32
B	0	2 (6.1)	14 (42.2)	11 (33.3)	6 (18.2)	33 (100.0)	3.6	0	33
CD	3 (3.0)	31 (31.0)	40 (40.0)	19 (19.0)	7 (7.0)	100 (100.0)	3.0	2	102

とんど使われないことである。和室１は同程度に使われている。余裕室である和室２または洋室に通すという，ふだん家族がいる部屋との分離可能な使い方は１割であった。

４）公室評価・要求

(1)充実希望

今後の充実希望をきいたところ，7.5割がだんらん室を最も充実させたい部屋としてあげている。客間は，最も充実させたい部屋と充実させたい部屋希望，あわせて２割で，接客専用室をとっていないことについての不満はあまり強くない。島根県は接客空間の格式を重視する土地柄であるが，県営住宅では，それらの機能を住宅に求めるよりも，家族だんらんにふさわしい住空間構成こそが，もっとも求められている。

(2)広さ評価

DKの広さ評価を表６に示す。８畳大で正方形平面のタイプは，５段階評価の平均値は3.6，評価「1.不満」の回答は無く，「2.やや不満」も少なく，一応の満足を得ている。これに対し，平面の短辺2700，７畳大のAタイプは，平均値2.7で評価「3.普通」に達していない。短辺3200，６畳大のC，Dは平均値3.0であるが，評価１と２の不満層が3.5割ある。広さ評価には，DKの面積だけでなく，通路となるスペース，平面の短辺寸法が影響している。ふだんの食事場所として使われるDKの広さは，８畳大は必要であろう。

DKの続き和室が，余裕室のだんらん室となった場合(84例)の評価の平均値は2.8で不満層も多い。続き和室も８畳は欲しいところである。

(3)DKと和室の関係

DKが広くても6.5割がDK横に和室が欲しいと答え，その理由としては，「和室でくつろぎたい」「接客時に便利だから」をあげている。DK横和室は，DKの広さを補う以外の機能も評価されている。また，DKが10畳以上あればDK横和室はいらないという指摘が1.5割あり，洋室の家族共用室充実志向もみられる。

DKと横和室の間のふすまは，常に閉めている世帯は全くなく，取り外しているが2.5割，常に開けているが３割であった。このように開けている理由としては，「開放感があり，広く見えるから」が８割，「DKと一体的に使うため」と「明るくなるから」が５割程度，「風通しのため」が2.5割等である。家族共用領域として，広く使える空間の必要性が伺える。

(4)洋室リビングの必要性

洋室のリビングについては，３割が「必要」と答え，「どちらでもよい」が４割，「希望しない」が２割で大都市圏ほどリビング志向は強くない。しかし，「必要」が「希望しない」を上回り，LDK系列の平面への移行も考えるべき時期にきていると思われる。

３－２－２　寝室

１）寝室数

家族型，家族人数別の寝室・余裕室数を表７に示す。「Ⅰ夫婦のみ（妻40歳未満）」での寝室は夫婦寝室のみの1.0室，「Ⅵ夫婦のみ（妻40歳以上）」では３割の夫婦別就寝があり，平均1.3室となっている。「Ⅱ夫婦＋長子就学前児」の３人，４人世帯では，９割が６畳和室１室のみの過密就寝となっており，「親子同室就寝要求は非常に強い。「Ⅲ夫婦＋長子小学生」の４人世帯では，２寝室が９割で，子どものみの寝

室を１室とっている。「Ⅳ夫婦＋長子中高生」の４人世帯では，平均2.6室で半数が子どもの専用個室をとり，「Ⅴ夫婦＋長子19才以上」の４人世帯では，平均2.8室で個室要求がさらに強く現れた結果である。

寝室数の総平均は1.5室であった。余裕室は，２室が5.5割，１室が3.5割で全体の９割に存在し，「Ⅳ夫婦＋長子中高生」と「Ⅴ夫婦＋長子19才以上」の４人以上世帯以外では，部屋数評価からみても，部屋数は充足しているものと思われる。

表７　寝室数

家族型	家族人数	1寝室	2寝室	3寝室	計	平均寝室数
Ⅰ夫婦のみ(妻40歳未満)	2人	26	1		27	1.0
Ⅱ夫婦＋長子就学前児	3人	33	2		35	1.1
	4人	16	5		21	1.2
	5人	1	1		2	1.5
Ⅲ夫婦＋長子小学生	3人		1	1	2	2.5
	4人	1	11		12	1.9
	5人	1	3		4	1.8
Ⅳ夫婦＋長子中高生	4人		3	4	7	2.6
	5人		1	1	2	2.5
Ⅴ夫婦＋長子19才以上	3人		7		7	2.0
	4人		1	5	6	2.8
	5人			1	1	3.0
Ⅵ夫婦のみ(妻40歳以上)	2人	7	3		10	1.3
Ⅶ夫婦＋祖父母	3人		1		1	2.0
Ⅷ夫婦＋子供＋祖父母	5人		1		1	2.0
Ⅸ母＋子供	2人	3	6		9	1.7
	3人		5	2	7	2.3
単（単身者65才以上）	1人	4			4	1.0
他（その他）	2人		2		2	2.0
	3人		1	1	2	2.5
	%	57.4	33.3	9.3	100.0	
計		92	55	15	162*	1.5

＊寝室数，または家族型不明5例を除く合計

２）就寝形態

(1)夫婦

家族型によって夫婦の就寝形態は大きく異なる。夫婦のみ寝室の割合が高いのは，「Ⅰ夫婦のみ（妻40歳未満）」，「Ⅳ夫婦＋長子中高生」，「Ⅴ夫婦＋長子19才以上」で９割程度以上であるが，「Ⅵ夫婦のみ（妻40歳以上）」では夫，妻の各専用寝室をとる夫婦別就寝が３割あるために７割とややその割合は低くなる。

子供年齢が低い世帯では，子供と夫婦の同室就寝の割合が高く，「Ⅲ夫婦＋長子小学生」で3.5割，「Ⅱ夫婦＋長子就学前児」で９割であった。Ⅱでは残り１割が，妻と子供同室，夫は別という就寝形態で，妻が子供の夜間の世話をしやすく，夫の睡眠の妨げとならないための夫婦別就寝であり，Ⅵの夫婦別就寝とはその意図が異なっている。

(2)子供寝室

子供の年齢別就寝形態を表８示す。親と同室就寝は，３才以下のほとんどすべて，４～６才の７割，７～９才の1.5割で，ほぼ小学校入学時に子供のみの寝室を持つ。小学生では，高学年でも異性の兄弟が同室就寝するが，中学生以上では性別就寝がされている。専用個室は，就学前児では１人もなく，小学校低学年の1.5割，小学校高学年の３割，中学生以上では８割となっている。専用個室は中学生からという状況である。

３）寝室・余裕室パターン

各タイプ，家族型別の寝室・余裕室の典型パターンを図１に示す。タイプによって，サンプルの少ない家族型については，省略している。

Ⅰの世帯については，A，Cタイプでは和室１（図

表８　就寝形態　子ども (%)

就寝形態		子ども年齢	0～3	4～6	7～9	10～12	13～15	16～18	19～	不明	計 人数
子どものみ	専用個室				3 (15.0)	6 (28.6)	12 (80.0)	6 (75.0)	18 (85.7)	1 (12.5)	46 (24.0)
	2人室	同性同室		4 (15.4)	3 (15.0)	3 (14.3)	2 (13.3)	1 (12.5)	1 (4.8)	2 (25.0)	16 (8.3)
		異性同室	1 (1.4)	3 (11.5)	9 (45.0)	7 (33.3)					20 (10.4)
	3人室	異性同室		2 (7.7)	2 (10.0)	1 (4.8)	1 (6.7)				6 (3.1)
親と同室	両親＋子１人		28 (38.4)	6 (23.1)	1 (5.0)					1 (12.5)	36 (18.8)
	両親＋子２人		30 (41.1)	6 (23.1)	2 (10.0)					4 (50.0)	42 (21.9)
	両親＋子３人		3 (4.1)	2 (7.7)		1 (4.8)					6 (3.1)
	母＋子１人		6 (8.2)	1 (3.8)		3 (14.3)			1 (4.8)		11 (5.7)
	母＋子２人		4 (5.5)	2 (7.7)				1 (12.5)	1 (4.8)		8 (4.2)
	父＋子１人		1 (1.4)								1 (0.5)
計 人数			73 (100.0)	26 (100.0)	20 (100.0)	21 (100.0)	15 (100.0)	8 (100.0)	21 (100.0)	8 (100.0)	192 (100.0)

2，図3参照）をだんらん室とし，残り2室のうちいずれかを夫婦寝室とする。Cタイプでは洋室が，5畳大，1.5間の押入付で，寝室使用が可能と判断され，若い夫婦の洋室就寝志向が現れる。Bタイプでは，和室1がだんらん兼用の夫婦寝室となっている。これは，和室1の平面の長辺に開口部があり開放感から広く感じられる事，だんらん室として使われるためにタンス類も少なく実質的に和室2より広い事から，住生活の分離より，感覚的，実質的広さを重視して夫婦寝室を選択したためと思われる。余裕室の用途としては，和室は泊まり客の部屋，納戸，洋室は音響室，書斎等である。

IIの世帯については，4タイプとも，和室1は余裕室のだんらん室となっている。親子同室就寝要求は強く，寝室は1室のみである。この寝室は，乳幼児をはやく就寝させるために，Iの世帯で，だんらん室寝室転用のみられたBタイプでも，だんらん室と分離している。寝室の選択は和室1以外の和室となっているが，これが2室あるAタイプでは，収納量が多く南面である和室3が使われている。余裕室用途が

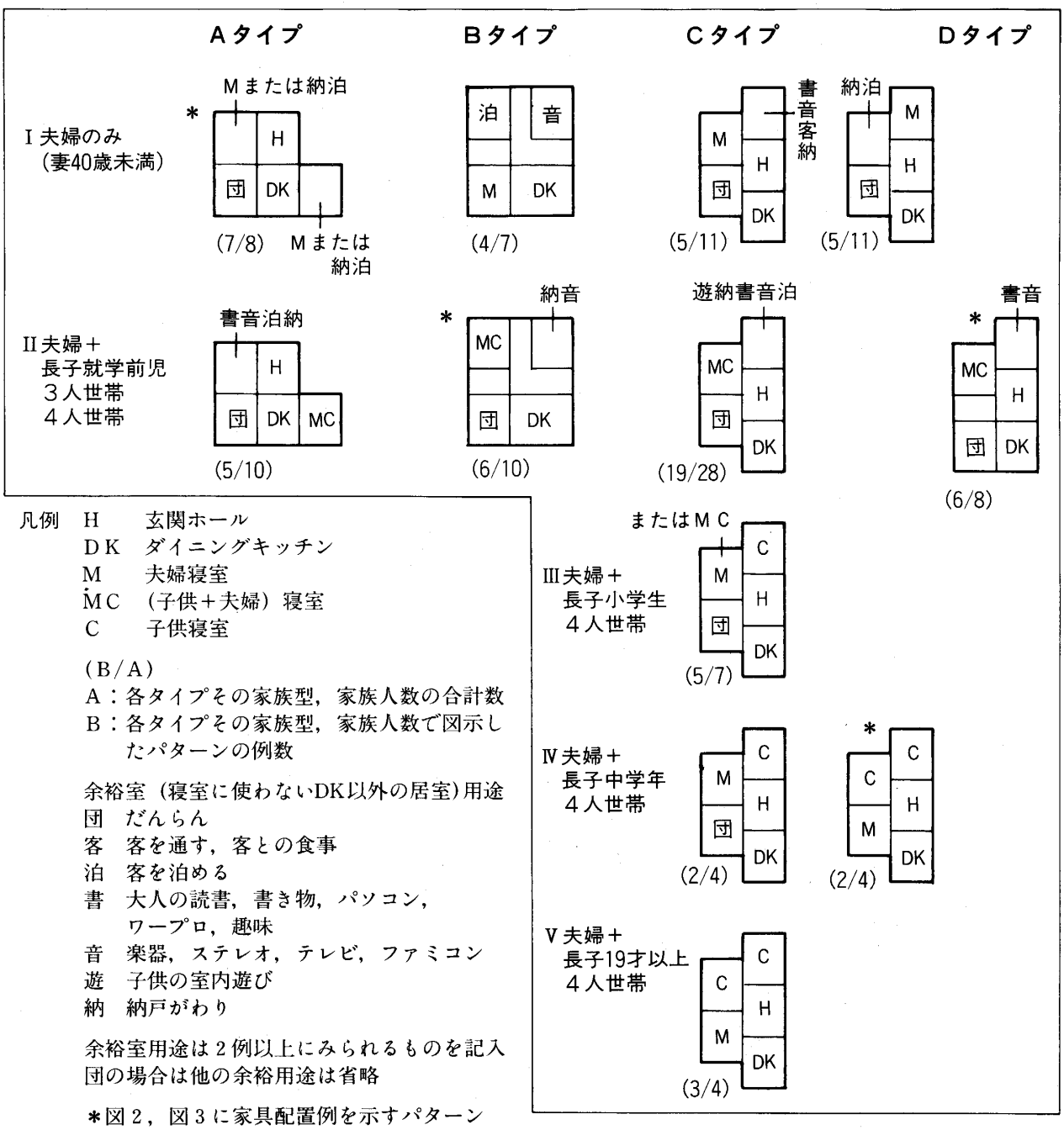
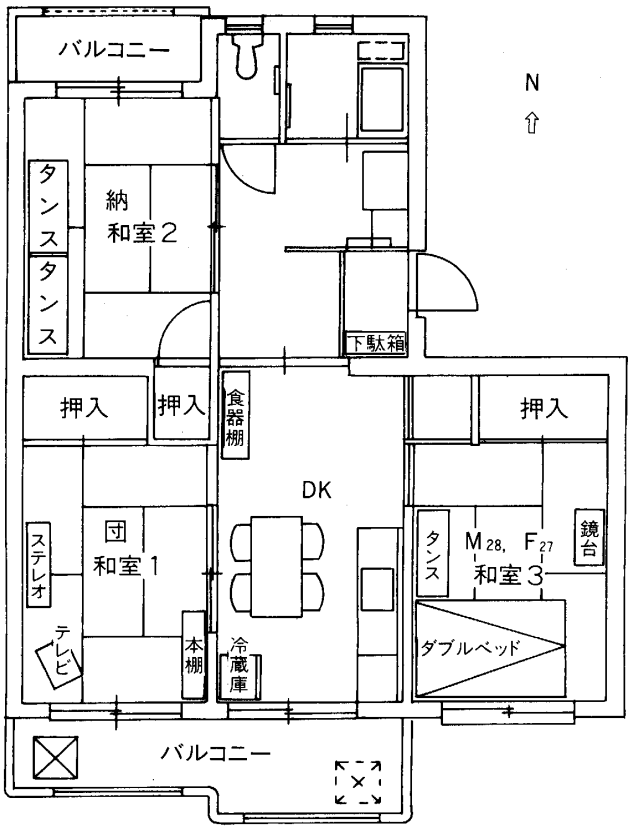
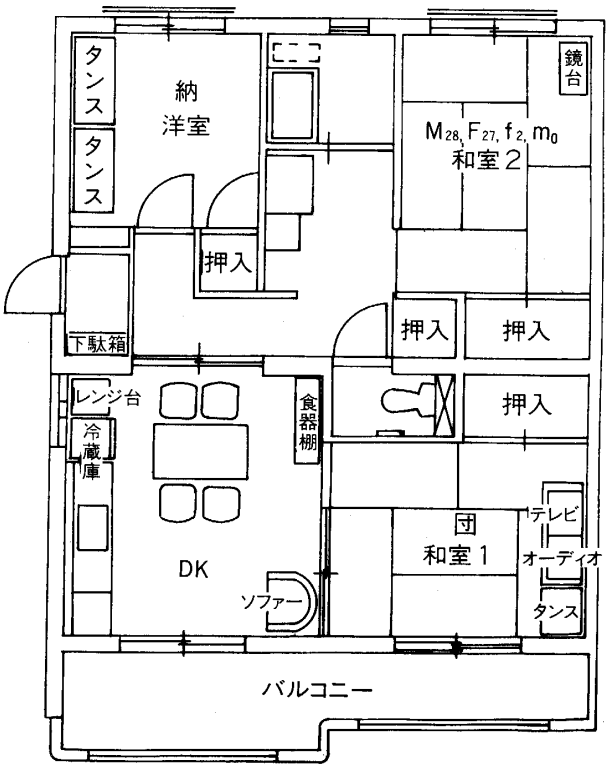


図1　家族型別，寝室・余裕室の典型パターン



Aタイプ
住居専用面積
62.90㎡
バルコニー面積
10.67㎡

家族構成 I



Bタイプ
住居専用面積
62.90㎡
バルコニー面積
9.62㎡

家族構成 II

凡例
M　夫就寝
F　妻就寝
m　男の子就寝
f　女の子就寝
右下の数字は年齢
余裕室用途は図１参照

図２　家具配置例　　A，Bタイプ

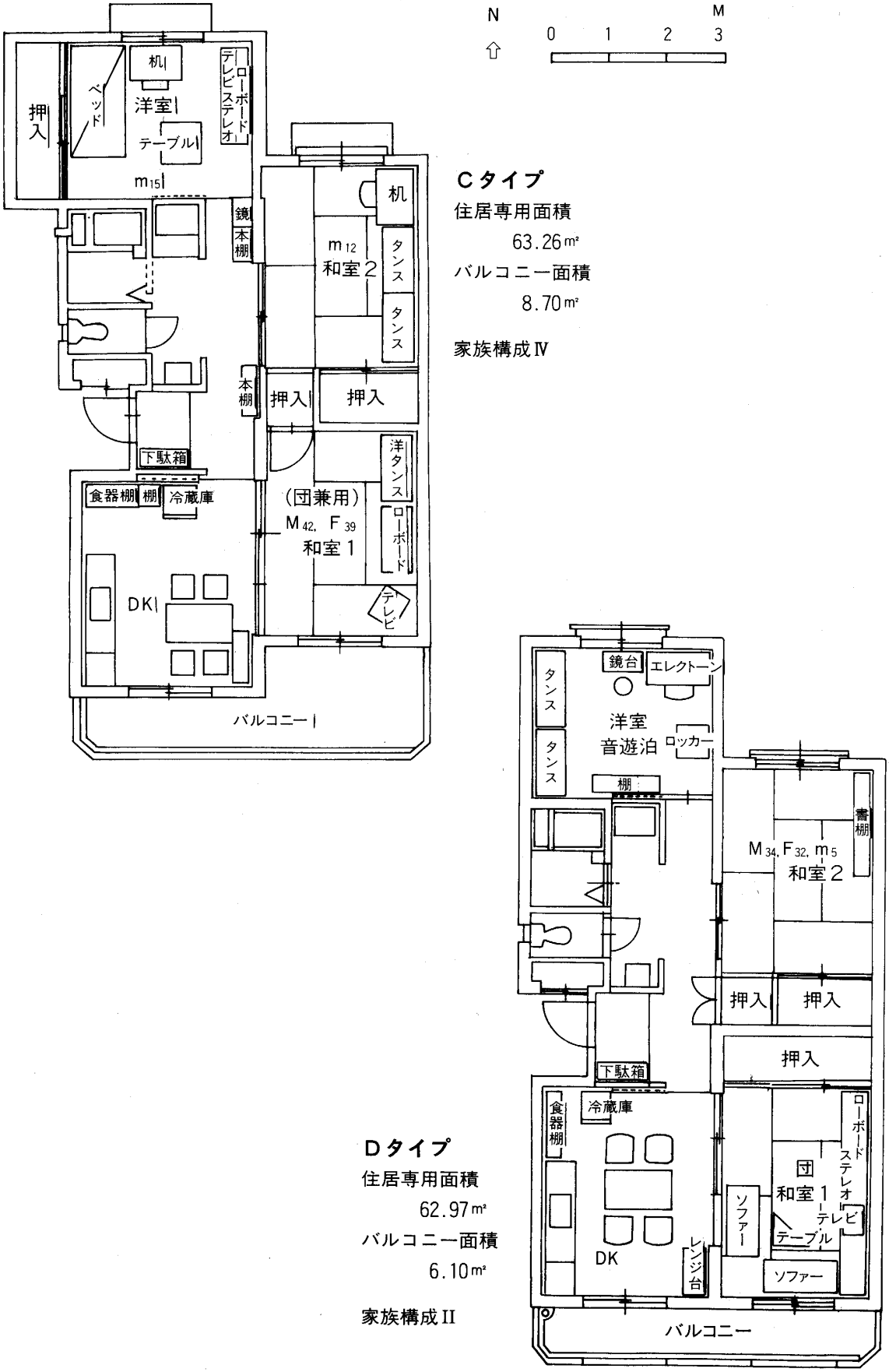


図3　家具配置例　　C，Dタイプ

Ⅰの世帯と異なる点は，Cタイプの洋室が，玩具を置いた遊び室となることである。

Cタイプ，Ⅲの４人世帯については，長子のみ，または子供２人の寝室が親寝室と分離し，洋室にとられる。次子の就寝形態は，年齢で決まり，乳幼児の場合は夫婦と同室就寝している。

Cタイプ，Ⅳの４人世帯については，洋室を子供２人室とする，Ⅲ４にみられるパターンと同じものと，北側居室２室を子供２人の各専用個室，和室１をだんらん兼夫婦寝室とするパターンに分かれる。これは，兄弟の年齢と性別が影響し，長子が中学生，次子が小学生で兄弟同性の場合は，洋室を子供２人室とし，子供の専用個室要求よりも，だんらん，寝室の分離を重視している。

Cタイプ，Ⅴの４人世帯については，子供の個室要求が強く，Ⅳの４人世帯でみられた，北側居室２室を子供の各専用個室とするパターンとなっている。

４）寝室の評価，要求

(1)和・洋室希望

寝室の和・洋室希望をきいたところ，夫婦のみ寝室の洋室希望は，全体で2.5割，Ⅰで４割，Ⅲ～Ⅵで1.5割であった。Ⅱは夫婦，子供同室就寝のため，夫婦のみ寝室希望の回答は少ない。夫婦寝室洋室希望は，大都市圏での６割[1]とは，開きがあるが，若い夫婦の洋室志向には注目すべきで，今後，県営住宅でも，夫婦寝室の洋室化要求が強くなっていくと予想される。また，現状での夫婦寝室洋室選択は，Ⅰで2.5割，他の家族型は全くなしで，希望との差は，洋室が4.5畳大，５畳大と狭い事，Ⅲ～Ⅴでは洋室は子供に優先的に与えたためである。

子供のみの寝室としては，洋室希望が7.5割であった。勉強・遊び兼用の子供寝室の南面希望は強いという結果が得られているが，実際には６割が北側であっても洋室を選択し，南面志向より洋室志向を優先している。

(2)広さ評価

表９に就寝形態別，寝室の広さ評価の平均値を示す。６畳和室は寝室となる場合に，５段階評価の平均値2.9で評価「３普通」に達していない。特に，夫婦＋子供寝室では2.5と低く，３人以上寝室としては窮屈に感じられている。夫婦のみでも2.9で不満層は多い。「３普通」を超える評価が得られるのは，妻または夫の寝室で3.3，妻と子供寝室で3.3，子供１人寝室で3.1で，６畳和室は概ね１人寝室としては適当な広さと評価されている。

表９　就寝形態別寝室の広さ評価の平均値

就寝形態 部屋	夫婦のみ	夫婦＋子供	妻子	妻or夫	子供1人	子供2人	その他	寝室計
6畳和室	2.9 (57)	2.5 (58)	3.3 (16)	3.3 (26)	3.1 (17)	3.0 (8)	3.5 (10)	2.9 (192)
4.5畳大，5畳大洋室	3.0 (6)	1.0 (1)	(0)	3.3 (4)	2.4 (26)	2.4 (11)	(0)	2.5 (48)

（　）内は実数

4.5畳大，５畳大洋室の寝室としての評価の平均値は2.5と低い。洋室を寝室とするのは，子供１人室という場合が多いが，その評価の平均値は2.4で，机とベッド等か置かれる部屋としては１人室でも狭いと評価されている。

(3)広さ希望

表10に就寝形態別，寝室の希望広さを示す。夫婦のみ寝室では，８畳希望が6.5割，平均7.5畳で，現状の６畳とは開きがある。夫婦のみ寝室の洋室希望では，和室希望にはなかった

表10　希望の寝室広さ

和室希望						就寝形態	洋室希望					
広さ希望%					平均広さ畳(実数)		広さ希望%					平均広さ畳(実数)
4.5畳以下	～6畳以下	～8畳以下	～10畳以下	10畳超え			4.5畳以下	～6畳以下	～8畳以下	～10畳以下	10畳超え	
2.3	25.6	67.4	4.7		7.5 (43)	夫婦のみ		25.0	62.5	12.5		7.8 (16)
	29.2	70.8			7.4 (24)	夫婦＋子供１人		28.6	28.6	28.6	14.3	8.6 (7)
	21.1	73.7	5.3		7.7 (19)	夫婦＋子供２人						(0)
	40.0	40.0	20.0		7.6 (5)	子供１人	6.3	37.5	50.0	6.3		7.2 (16)
	20.0	80.0			7.6 (5)	子供２人		45.5	36.4	9.1	9.1	7.6 (11)

10畳大希望が1.5割あり，平均7.8畳で，現住宅の4.5畳大，５畳大洋室との差は，夫婦寝室洋室選択を難しくしている。

夫婦＋子供寝室は，和室回答で８畳希望が７割を超え，現状の６畳では不満の強い世帯が，夫婦のみ寝室の場合以上に多い。

子供のみ寝室としては，洋室では６畳大または８畳大の希望が多く，１人室平均で7.2畳大，２人室平均で7.6畳大を希望している。子供寝室としても現状の4.5畳大との開きは大きい。

６畳和室は，１人寝室としては，約半数の希望に合うが，２人以上寝室としては７割程度以上の希望に合わない。２人以上寝室として，８畳和室の要求が強く，IIでは，ほとんどの世帯で夫婦＋子供という就寝形態をとり，その必要性は特に高い。

４．結び

この調査研究は，３DK型県営住宅入居世帯の住まい方実態，入居者評価を明らかにし，より住要求に対応した設計・計画のための資料をまとめることを目的に実施したものである。得られた結果を以下に要約すると，

１）DKの広さは，普段の食事場所として使われ，不満層の少ない広さ評価を得るためには，８畳大程度が必要である。

２）だんらんには，DKの続き和室が，DKとの間のふすまを開けて使われる。DK以外に家族共用室を１室確保するという要求，家族共用領域として広く使える空間の要求は非常に強い。

３）今後の充実要求は，第１希望に7.5割がだんらん室をあげ，専用接客室は１割程度という実態にかかわらず接客空間の充実要求はあまり強くない。接客空間の格式を重視する島根県でも，県営住宅入居世帯は，だんらん空間の充実した空間構成をもっとも求めている。

４）洋室リビングの要求は大都市圏ほど強くないが，「必要」が「希望しない」を上回り，LDK系列の平面への移行も考えるべき時期にきていると思われる。

５）余裕室（寝室に使用しないDK以外の居室）は，２室が5.5割，１室が3.5割で９割の世帯に存在し，「Ⅳ夫婦＋長子中高生」と「Ⅴ夫婦＋長子19才以上」の４人以上世帯以外では，部屋数評価からみても，部屋数は充足していると思われる。

６）子供の就寝は，３才以下のほとんど全て，４～６才の７割が親と同室，小学校低学年の６割，小学校高学年の５割が兄弟同室，中学生以上の８割が専用個室となっている。

７）夫婦寝室洋室希望は，「Ⅰ夫婦のみ（妻40歳未満）」で４割，全体で2.5割あり，希望広さは平均7.8畳大に対して，現住宅の洋室は4.5畳大，５畳大と狭いために，現状の夫婦寝室洋室選択はⅠで2.5割，他は全くなしである。若い夫婦の洋室志向には注目すべきで，今後，県営住宅でも夫婦寝室の洋室志向は強くなると予想される。

８）主寝室（夫婦寝室，夫婦＋子供寝室）の広さは和室では，８畳の要求が強く，現状の和室６畳とは開きがある。特にII夫婦＋長子就学前児では，ほとんどの世帯で夫婦＋子供という就寝形態をとり８畳和室の必要性は特に高い。

９）子供寝室は洋室希望が7.5割と現状の６割よりさらに洋室志向は強い。広さ希望は，洋室の１人室で希望平均7.2畳大，２人室で7.8畳大で，現状の4.5畳大，５畳大では不満が強い。

10）現在の住要求を整理すると，①洋室化要求に対応できる，夫婦寝室や子供２人寝室として選択できる８畳大以上の洋室を含んだ平面，②住生活の分離を促進する北側８畳和室を含んだ平面の検討も有効であろう。この場合，面積的な制限を考慮するならば，現在入居の家族構成・家族人数では，必ずしも３寝室型に固執する必要はないように思われる。

引用文献

１）大隈弘子他：日本建築学会大会学術講演梗概集　p.107（1989）

（平成元年10月31日受理）